

大阪府立北野高等学校 平成 29 年度 第 2 回 学校協議会 議事録 (抄)

1. 日 時：平成 29 年 10 月 14 日 (土) 9:55～12:10

2. 時 程： 9:55～10:40 TOEFL 講座参観

10:50～12:10 協議会 (於：校長室)

(1) 校長挨拶

(2) TOEFL 講座参観についての感想・意見

(3) 事務局より報告

・教頭

○ 授業アンケート他

授業アンケートについては各教科とも昨年度より数値は良い。
引き続きアカデミックな授業づくりを進めていく。

本校 GLHS、SGH 等の取り組みをまとめた概念図がほぼ完成した。
カラー版で作成予定。

・首席・教務主任

○ 指導と評価の一体化

授業アンケート自由記述を観点別に作成したものをもとに、
指導と評価について各教科でディスカッションを行った。その
結果を職員会議で教科ごとに PPT を使って発表した。

・首席・進路主任

○ 生活アンケート・模擬試験結果

生活アンケートの結果を成績別に分析し、部活や学習時間、スマホの時間との相関関係を示した。その結果、①成績との相関関係は部活の活動時間よりむしろ、休日の自主学習時間にあった。つまり、成績の良い生徒は休日にしっかり勉強できている。②スマホに時間を割かれている生徒が一定数いる。③平日の平均自主学習時間が 1 時間未満の生徒が年々減少している傾向にある。入学直後の教科オリエンテーションや学習習慣定着月間の取り組みが功を奏しているといえる、という結果が出た。今後は、これらの結果をもとによりよい学習習慣の定着をめざして取り組みを進めていく。

130 期の 7 月模試の結果については英数国共にこれまでを上回っている。

・指導部

○ 学校の様子

遅刻は昨年度後期が特に多かった。今年度は、現在のところ半減している。今後、特に 3 年学年団と連携して、入試に向けて出席状況が崩れないように指導していく。

通学路のマナーに関する苦情が時々ある。

(4) 意見交換、協議 協議内容は以下の通り。

3. 主な協議内容及び提言

(1) TOEFL 講座に関して

(事務局) 講師 5 名は東南アジア出身 (フィリピン、マレーシア、中国、タイ) で、アジアの文化に親しむことを通じて英語にも親しめるように工夫している。SGH の基礎講座としても位置付けている。内容は TOEFL 受験に向けたものとなっている。

(委員) TOEFL 講座の目的と成果はどのようなものなのか。TOEFL を受験し成績アップをめざしているのか、めざしている方向性がややわかりにくい。

(校長) TOEFL-iBT のハードルが 1 年生には高すぎることもあって、ストレートに TOEFL の受験をめざすものにはなっていないが、橋渡しとなるように、4 技能をバランスよく学べるコミュニケーションタイプな講座をめざしている。

(委員) もっと楽しそうにやればよいのに、と感じた。明るい雰囲気できないものか。

(委員) ぼそぼそ話している印象。座っているだけではなく、立ってアクティビティをしているクラスはしっかりとできていた。

(委員) スクリーンが見えにくいところがあった。明るさや文字の大きさを調整することも必要。

(委員) 若干内容についていけない生徒も見受けられた。どのあたりに照準を合わせるのかも考える必要がある。

(委員) TOEFL を学びながら、アジアの文化にもというの少し無理があるのでは。また、かなり口語表現も多く使われており、生徒たちが「半分しかわからない」と思うか「半分もわかった」と思うかで違ってくる。雰囲気づくりが大切。

(校長) 指摘の通り。いただいたご意見を来年度の取り組みに反映していく。

(2) 事務局よりの報告に関して

(委員) 資料の授業アンケートの自由記述欄から、教科書には載っていない先生の専門知識、豆知識が生徒の意欲を高めていることがわかる。やはり教員のそういう頑張りが必要なのでしょう。外からの苦情が多いということだが。

(委員) 親の立場で考えると、苦情の話は学校があくせくする側ではない。教員は大変なのに、苦情にまで対応するのは大変だ。

(事務局) 苦情に関して、生徒が気付いていないということもある。横に広がって歩いている意識もない。気を付かせるような指導が必要だと考えている。

(校長) 苦情があった時には、できるだけ詳しく、「何時頃、どこで、どのように・・・」と聞き取るように教員には伝えている。名乗っていただけない苦情もあるが、責任ある苦情にはピンポイントで誠実に対応し、当該生徒にも改善したかどうかを具体的に意識させることが大切だと考えている。

(委員) 授業ではどの層を意識するのが良いのか。大学入試もちろん大切だが、その先の社会で活躍する人材の育成をしてもらいたい。

(事務局) 上の層に合わせると、下の層がついていけない。上の層には+αの紹介など、知的好奇心をくすぐるようなきっかけを与えて取り組ませる。ボリュームゾーンのちょっと上を照準にし、授業中に理解が追い付かない生徒にはどんどん質問に来るように伝えている。

(委員) 質問に来る生徒は相変わらず多いのですか。

(事務局) 多いです。

(事務局) TOEFL 講座では生徒の楽しそうな様子が見えていただけなかったが、本校の SET (スーパーイングリッシュティーチャー) と英語教員のとの TT では生徒は非常に楽しそうにアクティビティに取り組んでいる。どの学年でも、英語の授業がコミュニカティブになるようなチャレンジングな取り組みを行っている。

(校長) 学力幅がある限り、どこに合わそうとも理解できない生徒と退屈な生徒が出てくる。そこで、最上位よりさらに上に照準を置くという考え方がある。先生方の授業をほぼ参観したが、感じたことはどの授業も丁寧で分かりやすいこと。しかし、高校にもなると、先生が「教える」ことは難しく、生徒が授業を受けた後、なぜだろうとか、自分でもう少し調べてみようとか、図書館で本を借りて深めてみようと思うような付加価値、いわば、「もやっとした感じ」が残るような授業をしてほしい、と何人かの先生には授業後にコメントした。

(委員) 通学路での苦情については、周りの状況に気づかず過ごしていることが多いとのこと。北野の生徒なら気がつけばできる。気づかせてやることが大切

(委員) SGH (スーパーグローバルハイスクール) 事業の進捗はどうか?

(校長) SGH の文部科学省の評価が芳しくなかったのは、取組それぞれが、「どんな生徒を育てたいのか」「生徒にどんな力をつけたいのか」を軸として、構造的に繋がっていない、あるいは、そう見えないことに起因していると思っている。先ほど、本校の取り組みをまとめた概念図を見ていただいたが、指定4年目の今年、最終年の来年の2年をかけて、一つひとつの取り組みの意味づけを明確にしつつ、事業成果を明らかにしていきたい。

次回は2月6日(火) 15:00~17:00(予定)